

「五輪書」(一)

みやもとむさし  
宮本武蔵

ちのまき  
地之巻

.....

夫それ兵法といふ事、武家の法なり。将たるものは、とりわき此法をおこなひ、卒

たるものも、此道を知るべき事也。今世の中に、兵法の道慥たしかにわきまへたると

いふ武士なし。先づ、道を躰あらはして有るは、仏法として人をたすくる道、又儒道

として文の道を糺ただし、医者といひて諸病を治する道、或は歌道者として和歌の道

をおしへ、或は数寄者・弓法者・其の外諸芸・諸能までも、思ひ思ひに稽古けいこし、

心こころ心こころにすくもの也。兵法の道にはすく人まれ也。先づ、武士は文武二道といひ

て、二つの道を嗜たしなむ事、是道也。縦たとひ此道ぶきようなりとも、武士たるものは、

おのれおのれが分際程ぶんざいほどは、兵の法をばつとむべき事なり。大形武士の思ふ心をは

かるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜たしなむ事と覚ゆるほどの儀也。死する道にお

いては、武士斗ばかりにかぎらず、出家しゅっけにても、女にても、百姓ひやくしやう已下いかに到る迄まで、義

理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事は、其差別しやべつなきもの也。武士の兵

法をおこなふ道は、何事におゐても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合に  
かち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。  
是、兵法の徳をもつてなり。又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役  
にはたつまじきとおもふ心あるべし。其儀におゐては、何時にても、役にたつや  
うに稽古し、万事に至り、役にたつやうにおしゆる事、是兵法の実の道也。

一 兵法の道といふ事

.....

凡そ人の世を渡る事、士農工商とて四つの道也。一つには農の道。農人は色々  
の農具をまうけ、四季轉變の心得いとまなくして、春秋を送る事、是農の道也。  
二つにはあきないの道。酒を作るものは、それぞれの道具をもとめ、其善悪の利  
を得て、とせいをおくる。いづれもあきないの道、其身其身のかせぎ、其利をも  
つて世をわたる也。是商の道。三つには士の道。武士におゐては、道さまさまの  
兵具をこしらへ、兵具しなじなの徳をわきまへたらんこそ、武士の道なるべけれ。

兵具をもたしなまず、其具々々の利をも覚えざる事、武家は少々たしなみのあき物か。四つには工の道。大工の道におゐては、種々様々の道具をたくみこしらへ、其具々々を能くつかい覚え、すみがねをもつてそのさしづをたゞし、いとまもなくそのわざをして世を渡る。是士農工商、四つの道也。兵法を大工の道にたとへていひあらはす也。大工にたとゆる事、家といふ事につけての儀也。公家・武家・四家、其家のやぶれ、家のつゞくといふ事、其流・其風・其家などといへば、家といふより、大工の道にたとへたり。大工は大きにたくむと書くなれば、兵法の道、大きなるたくみによつて、大工にいひなぞらへて書頭はす也。兵の法をまなばんとおもはゞ此書を思案して、師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也。

一 兵法の道、大工にたとへたる事

大將は大工の統領として、天下のかねをわきまへ、其国のかねを糺し、其家のかねを知る事、統領の道也。大工の統領は堂塔伽藍のすみがねを覚え、

宮殿楼閣のさしづを知り、人々をつかひ、家々を取立つる事、大工の統領も武家

の統領も同じ事也。家を立つるに木くばりをする事、直すくにして節ふしもなく、見つき  
のよきをおもての柱とし、少しふしありとも、直すくにつよきをうらの柱とし、たと  
い少しよはくとも、ふしなき木のみざまよきをは、敷居しきい・鴨居かもい・戸障子としょうじと、それ  
ぞれにつかひ、ふしありとも、ゆがみたりとも、つよき木をば、其家のつよみつ  
よみを見わけて、よく吟味ぎんみしてつかふにおゐては、其家ひさしく久敷ひさしくずれがたし。又材  
木のうちにしても、ふしおほく、ゆがみてよわきをば、あししろともなし、後に  
は薪たきぎともなすべき也。統領におゐて大工をつかふ事、其上中下を知り、或あるいはと  
こまはり、或は戸障子、或は敷居・鴨居・天井てんじょうい已下、それぞれにつかひて、あ  
しきにはねだをはらせ、猶なお悪しきにはくさびをけづらせ、ひとをみわけてつかへ  
ば、其そのはか行ゆきて、手際てぎわよきもの也。果敢はかの行き、手ぎわよきといふ所、物毎ものごとを  
ゆるさざる事、たいゆう知る事、気の上中下を知る事、いさみを付くるといふ事、  
むたいを知るといふ事、かやうの事ども、統領の心持こころもちに有ある事也。兵法の利りか  
くのとつ。

士卒しそつたるものは大工にして、手づから其道具をとぎ、色々のせめ道具をこしらへ、大工の箱に入れて持ち、統領いらいつ云付くる所をうけ、柱がやうりやうをもてうのにてけづり、とこ・たなをもかんなにてけづり、すかし物・ほり物をもして、よくかねを糺ただし、すみずみめんどう迄も手ぎわ能よくしたつる所、大工の法也。大工のわざ、手にかけて能くしおぼへ、すみがねをよくしければ、後は統領のちとなる物也。大工のたしなみ、よくきるゝ道具を持ち、透々ひまひまにとぐ事肝要也。其道具をとつて、みづし・書棚しよだな・机卓きたく・又はあんどん・まないたなべ・鍋なべのふた迄も達者たつしやにする所、大工の専也せん。士卒たるもの、このごとく也。能々よくよく吟味有るべし。大工のたしなみ、ひずまざる事、とめをあはする事、かんなにて能くけづる事、すりみがかざる事、後にひすかざる事、肝要なり。此道をまなばんとおもはゞ、書頭かきあらはす所のことごとくに心を入れて、よく吟味有るべきもの也。